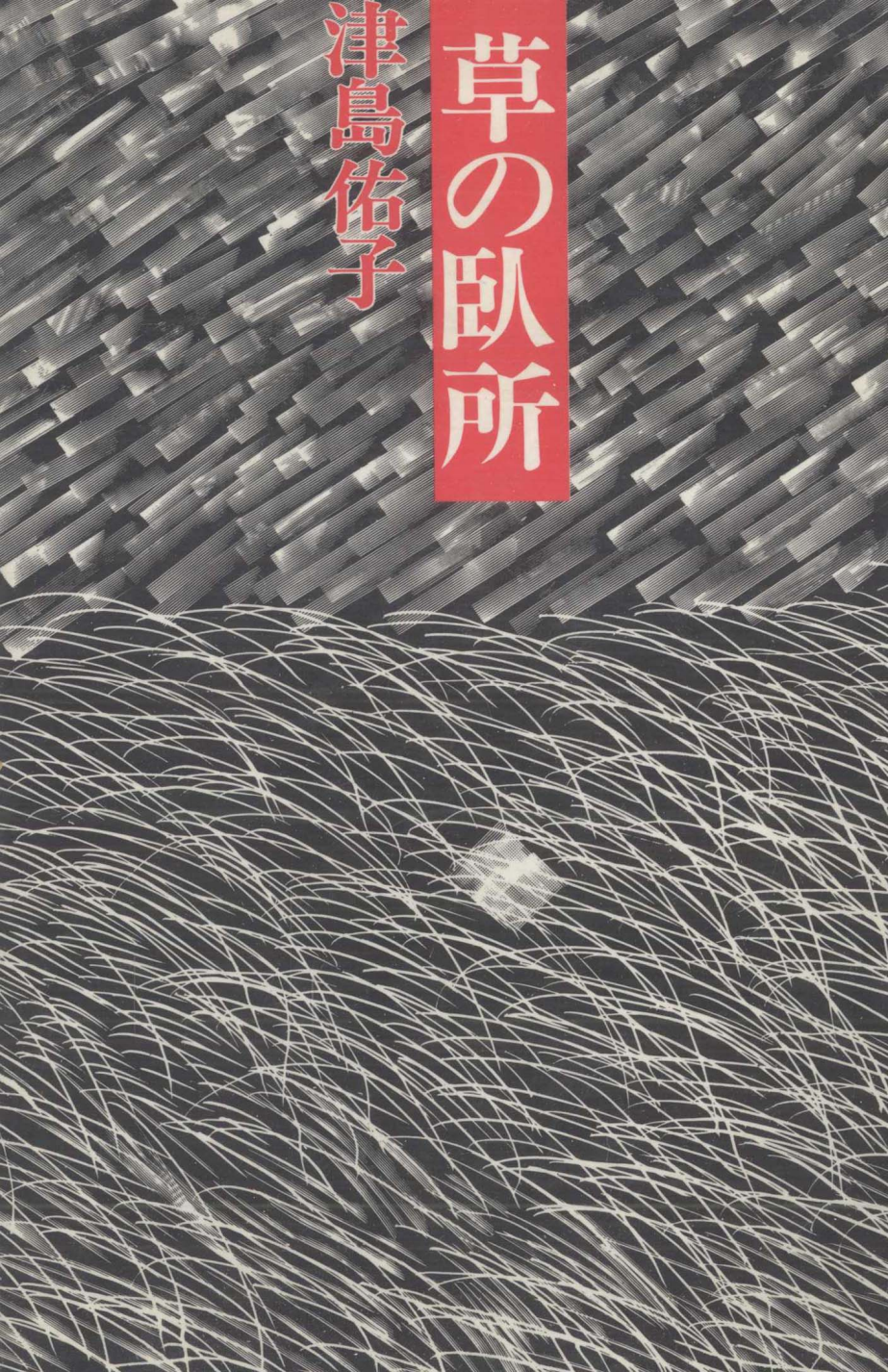
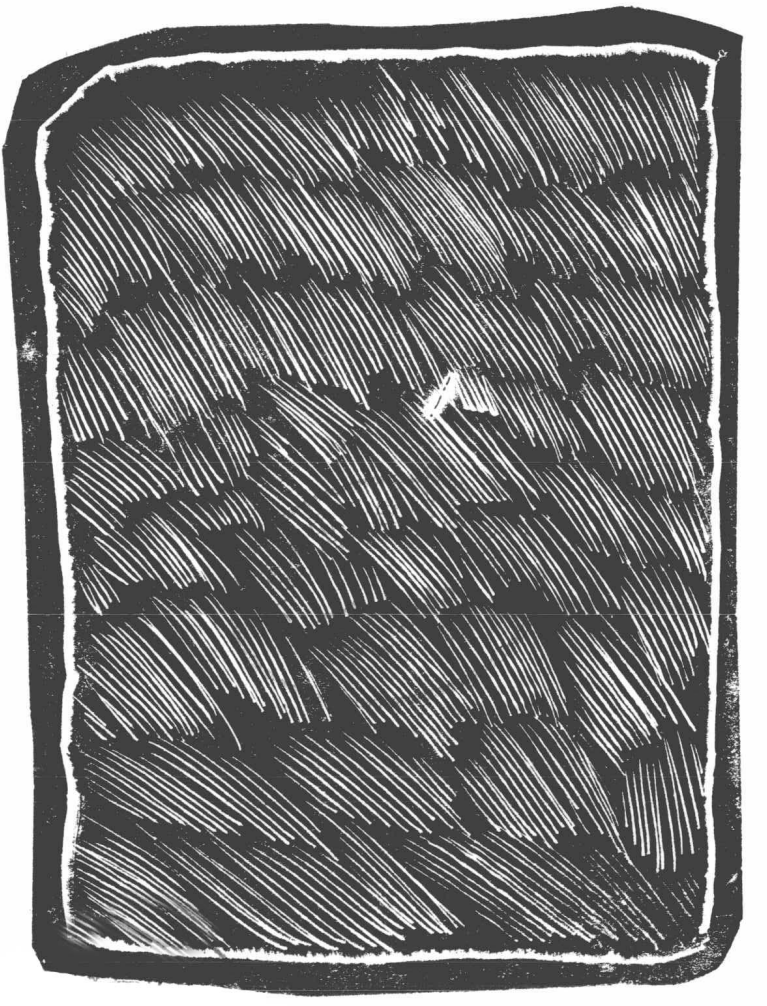
草の臥所

津島佑子



津島佑子



講談社

草の臥所（くさのふしど）
昭和五十二年　七　月三十日　第一刷発行
昭和五十三年十一月十四日　第三刷発行
著　者　津島佑子
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二ー一二ー二一／郵便番号一一二
電話東京（〇三）九四五ー一一一一（大代表）／振替東京八ー三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社
定　価　九八〇円
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします
© Yuko Tsushima 1977, Printed in Japan
0093-128519-2253（0）　（文1）

目次

草の臥所　5
花を撒く　123
鬼火　159

装帧·司修

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

津島佑子作品集

草の臥所

草の臥所

海は黄緑色に見えた。私の眼が一面の草の色に侵されていたためだろう。一週間あとに出来上がってきた写真を見ると、背景の海はちゃんとした青い色だった。本当にこんな色をしていたかしら、と久美にも聞いてみたけれど、久美は、そうでしょ、と写真を見直すこともしないで答えた。きれいな青だったわ。

見渡す限り、草の世界だった。淡い緑が盛り上がり、八方に連なっていた。今まで、草というものを見くびっていたと思った。風が強かった。風の方向が変わる度に、私たちは足を止め、見える限りの草のうねりの変化を注意深く眼で追わずにはいられなかった。縦横にうねって走る草の長い影が眩しかった。広々したところに行きたいと言いだしたのは私だったのだが、尾根を歩きながらこんな心細いところへ連れてくるなんて、と久美を恨みだしていた。自分の背より高いものが視界にひとつも見えない。いや、展望台だけは尾根に着いた時から見えていたのだが、それは一本の鉄骨を無造作に地面に突き刺したような簡単なもので、しかもそ

のてっぺんには鳥が一羽止まっていた。いかにも、寒々しい眺めだった。

私たちはその展望台に向かって進んでいた。道は一本しかなかった。

海は右手の崖下に見えた。遠いので波の音は聞えなかった。柔かなゴムのように見え、たとえ私たちのうちの誰かが足を踏みはずして転げ落ちていったとしても、体がそこから弾き返されそうだった。でも、私たちは安心して海を覗きこんでいたわけではない。こわくて、それどころではなかった。海から吹き上げて来る強い風のために、体を真直ぐにして歩くことさえむずかしかった。いつでも風が吹き荒れているところであるらしかった。私たちの運が特別に悪かったわけではないようだ。空だけは見事に晴れ上がっていた。

バスの停留所から三十分ほどゆるゆるの山道を登った。山の中腹ではまだ風の勢いは弱く、私たちの気分も軽やかだった。久美は娘のななと声を合わせて童謡を歌ったりしていた。尾根に着いたら、適当な場所で弁当を食べ、それから尾根伝いに歩いていって向こう側の国道に出、路線バスに乗って駅に戻ろうということになっていた。久美が幼い頃、両親に連れられて来たところだ。その時から中学校に入るまで、久美は父親と会わなかったということだ。

〈別れる時も娘のわたしのため、一緒になる時もわたしのため、だなんて勝手なことを言っていた。でも、あの遠出は楽しかったわ〉

久美はなつかしそうに言った。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

〈とっても気持のいいところよ、日帰りでも行けるし〉

〈そこよ、そこに行こうよ〉

私はこの久美の言葉に飛びついてしまった。久美は急に曖昧な顔になって、頷き返した。

ピクニックに出かけることだけは、二週間前から決めていた。季節が春に変わろうとしていた。沈丁花が咲き、コブシが咲きはじめていた。なにか楽しいことが起こらなければならなかった。私たちは毎晩のように、ななを連れて家の近所を歩きまわった。でも、それだけでは暖かくなった季節に泡立つ気持を抑えるには足りなかった。

前の晩、私は塩ザケの切身と梅干しと海苔を持って、久美の部屋へ行った。久美は敷き放しの蒲団の上に煙草をふかしながら寝そべっていた。いつものことだった。私に笑顔も見せなかった。一人で小さな食卓に向かい、ソーセージを齧じっていたななは、私を見ると、母親の機嫌などそっちのけで、オヤマ、オヤマ、と叫び、私の足にすがりついてきた。ななにもできそうなことは手伝わせながら、私は大きなおむすびを幾つも作った。食べきれないことが分かっていても、十個より少い数ではどうしても不足のような気がした。おむすびの数と大きさが、そのまま私の気持の弾みだった。

弁当を携えてピクニックへ行くなんて、何年振りのことだったろう。高校生の時、友人とその家族に誘われ、外国船の来る港までドライヴを楽しんだことがあったが、あれがたぶん最後

の機会だった。あの友人とも高校を卒業して以来、一度も会っていない。確か、彼女の母親が亡くなってほどない頃だった。彼女の父親と妹と、それから運転手がいた。住み込みの、すでに六十歳近い運転手さんだった。私はその人とばかり一緒に歩き、話していた。いつでも、運転手さんとかお手伝いさん、学校でなら小使いさん、といった人たちと真先に親しくなり、気持を許して話し合うようになるのが、私の性質なのだ。母には嫌われ続けていた性質だ。強いものから逃げ、弱いものとばかり交じわりたがると。

それでも、私はあのドライヴを楽しんでいた。肝心の友人の方は、父親や妹を相手の口げんかに終始していた。やはり、三月の終わり頃だった。海は荒れていた。もう十年以上も前のことだ。私より七歳下の久美は、まだその当時、小学生だった。近所の子どもたちに、チヂレッ毛、天然パーマ、と言われるたびに、殴り返していた。けれど、久美の髪の毛を受け継いだなの方は、その西洋人じみた髪の毛のおかげで、通りすがりの大人たちにも可愛がられていた。あんな風に可愛がられるのも今のうち、わたしも三歳ぐらいまではちやほやされていたっていうもの、とそうした機会がある毎に、久美は顔を歪めていた。

尾根に着くまで、ななは一人で歩き通した。が、草の拡がりを一眼見るなり動こうとしなくなってしまった。置いていくよ、そんな子は、と久美はななの頬を打って、先に行ってしまった。私は泣きじゃくるななを抱き上げて、あとを追った。

——無理ないわ、まだたったの二歳なのよ。
久美が振り返り、答えた。
——あなたがいるから、甘えて見せてる。
——とにかく泣かせないで、せっかくのピクニックなのに。
——……おいで。
久美は私からななを抱き取り、背中に負った。ななは泣き続けていたが、それでもやがて後の私に笑顔を作って見せた。私はその頭を撫でてやった。
展望台のもとに着いたのが、昼に近い時刻だった。それまで私たちは無言で歩き続けていた。久美がななを背中から下ろして、言った。
——一休みしようか。
——それはいいけど、お弁当、どうしよう。
私が言うと、ななが私の手提げ袋を引張りながら金切り声を出しはじめた。
——オベントウ！　オベントウ！
——うん、じゃお弁当にしようね。
久美がこともなげに言うので、私は慌ててしまった。
——ここじゃだめ。ちゃんとした場所を見つけなくちゃ。

鉄骨を組んだだけの展望台は風除けになりそうにもなかった。その鉄骨も錆びきっていて、朱色の鉄粉が辺りに舞い落ちている。そしてなによりも、頭上を旋回している烏が気になっていた。たった一羽で展望台を縄張りにしているらしい。

久美も、その烏を見上げた。

――……あれ、気にすることないわ、一羽なら。

――でも……もう少し行ってみましょうよ、ちゃんとした場所に行って……。

久美が笑いだした。声をほとんど出さない、穏やかな笑いだ。その笑いに会うと、いつも私の方が年下のような気持に誘いこまれてしまう。

――ちゃんとした場所だなんて、どこのこと言ってるの。ここはだめなの？

苦笑して、私は頷いた。〝楽しいお弁当の時間〟にこだわっている自分の子どもっぽさにようやく気がつき、恥かしかった。それでも期待を捨てることはできなかった。久美は周囲を見渡してから、ななに言った。

――お弁当は、もう少しあと。まだ時間じゃないからね。

ななはまだ二歳だけれども、赤ん坊の時から預けられている保育園で躾けられているせいか、何ごとも時間で区切られて言われると納得できるらしく、この時も泣きだしはしなかった。子どもにしては整った眉をひそめ、マダナノ、と母親に聞き返していた。

久美は私に向き直ると、どうせなら、ここで記念写真を撮っていったら、と言った。それには私も異存はなく、早速、手提げ袋からカメラを取り出した。朝からまだ一枚も撮っていなかった。適当にポーズを取るように、と久美に言った。久美はもう一度周囲を見渡してからななを促し、展望台の鉄梯子を登りはじめた。垂直の、一段一段の幅も広い鉄梯子だったが、ななは怖れを見せず、母親の先にたって器用に登りはじめた。ななこわがるのは、日頃接することのない視界の拡がりだけなのかもしれなかった。ななは母親が路上で酔いつぶれて寝てしまっても、落着いて傍にしゃがみこみ、母親の意識が戻るのを待っていられる子どもだ。また、公園のブランコで母親に百八十度近く揺すられても、息を弾ませて笑っている。

——なな、そこでおばちゃんの方を見て、笑ってごらん。

久美とななが鉄梯子の中途で、私を振り向き、笑顔を作った。私は急いでカメラを構え、シャッターを切った。久美の窮屈なジーンズとセーターの間から、桃色のパンティーと白い腰の肉がはみ出ていた。肥った久美の体には、大抵の衣服の寸法が間に合わない。いつか、久美に体重を聞いてみたら、私より二十キロも多くて、びっくりさせられたことがあった。その時、久美は私に何よりも大事な秘密を教えるような口調で、一人で子どもを育てるにはこれだけの体重が必要なのよ、痩せっぽちのあなたでは絶対できない、と言った。本当にそうだろう、と思え、久美のおなかの過剰な肉を笑えなくなってしまった。私には十分間と続けて抱い

ていることのできないななの体を、久美は中身がスポンジの人形のように軽々と持ち上げ、肩車でもオンブでもななの注文通りに、長い間、してやれる。食事をする久美の肩の上にななが全身の力を預けてしがみついているのを見せられたりすると、私の方が疲労を覚えた。

ななにとって久美の体は、父親のように頼り甲斐のある、大きな力強いものとなっているのだろう。父親のような広い胸に、他のどんな母親にも負けない大きさの乳房が二つ並んでいる。ななは母親のそばにさえいることができれば、気が強くなり、滅多なことでは泣かなくなる。他の子どもが傍にいれば、たとえ自分より年上でも、好んでいじめにかかった。私もしばしば髪の毛を引張られ、太腿を齧じられた。けれど、それはいつでも久美がそばにいる時に限られていた。久美に頼まれて代りにななを保育園に迎えに行った際、十人ぐらいの子どもたちが紙吹雪を撒き散らして広いホールを走りまわっているなかで、ななは一人坐りこみ、ぼんやりまわりを見渡していた。私がその手を握り、立ち上がらせようとすると、ななは怯えて泣きだした。ママは。ななのママはどこ。

久美とななが展望台の上に着いてから更に二枚、私が下から写真を撮った。二人とも写真向けの笑顔を作り続けていた。小さな展望台だったが、それでも高さは五、六メートルはあっただろう。あとで出来上がってきた写真を見ると、二人の表情など遠くて判らなくなっていた。

下に降りてくると、久美は私からカメラを受け取り、今度はあなたが登るように、と言った。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com